

松宮彌平 著

日本語教授法

日語文化學校刊行

昭和十一年六月一日印刷
昭和十一年六月五日發行

(定價金貳圓)

著者

松宮彌平

發行者

東京市神田區美土代町七
日語文化學校代表者
松宮一也

印刷人

東京市本所區厩橋一丁目廿七ノ二
河合勝夫

印刷所

東京市本所區厩橋一丁目廿七ノ二
出版印刷株式會社本所分工場



發行所

東京市神田區
美土代町七

發賣所

東京市京橋區
銀座四丁目二

日語文化學校
教文館

序

近來海外における日本語熱の急激な向上は國運の伸展を如實に表徴するもので、まことに喜ばしい次第であります。アメリカ合衆國においては、日本語教授の私塾様のものが二百數十の多きに達し、英佛獨の大學にも日本語の講座が設けられて居ります。支那における日本語熱もまた頗る高く、シヤムには日本語を中等學校の必修科目に加へようと云ふ意見もあると聞いて居ります。又滿洲新帝國における日本語の普及は日滿の友好上最も重要な政策であることは申すまでもありませんし、我が植民地たる朝鮮や臺灣における國語教育がその統治上いかに密接な關係を有するかは叙説を待たないものであります。或は南北アメリカにおける

本邦移民の第二世に對する國語教育も決してゆるがせにすることの出来ないものであると存じます。今後我が國運のます／＼隆昌に赴くに從ひまして、日本語の海外普及がいよ／＼盛になることでありませう。

然るに、日本語を海外に普及せしめるに當り、種々の困難がありました、意の如くならないのは誠に遺憾に存じます。然らばその困難とは何かと申しますと、我國の言語文章及び文字が甚だ複雑不規則でありまして、その據るべき標準を明確に知らせることが出来ないのがその第一であります。外國人に教授するのは申すまでもなく、現在の東京語であります、然るに現在の東京語には、發音語句及び語法の上から種々の疑義がありまして、教授上支障を來すことが少なくありません。たとへばアクセントにしても、人によつて區々であるやうな状態でありますから、

歐米の人々は之を學ぶのに非常ななやみを有つて居るのであります。

次に、日本語を教授するに適當な教授書のないことがその第二であります。これまで外國人にして日本語學習の希望者があまり多くありませんでしたので、自然適當なものも現はれなかつたことゝ思ひます。英佛獨等の國語を學ぶ場合に、各種の方式によつた教授書が頗る豊富に存在して居りますから、學習上何等の困難も感じませんが、之に反して、日本語については、推獎すべきものがきはめて稀であります。

すでに推獎すべき教授書が乏しいのでありますから、その教授指導の方法についても特に見るべきものがないのがその第三であります。第十九世紀の末葉から、ヨーロッパにおいていはゆる新教授法なるものが起つて參りまして、外國人に對する言語教授法が急速に進んで來たのであ

りますが、然るに、かやうな立場から日本語を教授指導する方法があま
り研究されて居りませぬ。現在のところ確固たる自信を以て、外國人に
日本語を教授し得る最善の方法が成立つて居ないと申しても過言でない
と存じます。

日本語に對する教授指導の方法が常に動搖して、確固不拔のものがな
い様なわけでありますから、多年研究を積み指導に堪能な教授者の乏し
いことがその第四であります。教授の方法にいかによれたものがあるに
致しましても、若し之を運用するにその人を得なければ、全く水に浮べ
る月影をつかむやうなものです。決して好成績を収めることが出来ませ
ん。日本語の教師としては、先づ標準語を十分正確に話し得る人でなけ
れば、固よりその資格のないものでありまして、殊に外國人に對しては

アクセントが最も大切なものであります。これまで日本語の教師を見ますと、標準語の素養に乏しく、アクセントも一定の規準にはまつて居りませんので、外國人に少なからぬ不安を與へて居ります。

以上四つの條件が具つて居りませんために、日本語の教授が意のごとく進まない憾がありました。然るに日語文化學校國語部長松宮彌平君は本校の前身たる日語學校創立以前よりその教授の任に當ることすてに數十年、その間教材の採集選擇に苦心し、教授指導の方法を攻究し、或は口述により或は通信を以て外國人の教養に努め、大にその實績を擧げて今日に至つて居られるのでありまして、松宮君こそ以上の四條件を是正して日本語教授の徹底を期し得る資格を完全に具備した人格と申して差支ありません。これまで外國人に對する日本語教授の方案につき、

實際上の經驗から卓絶した意見も度々發表せられ、近くは國語口語法
A Grammar of Spoken Language も公にされたのであります。今又
本書を發刊されるに至つたのでありますが、これは君が數十年來日夜寢
食を忘れ、肝膽を碎いて教授指導の任に當り、經驗に經驗を積まれた最
も尊い結晶でありまして、たゞ机上の空論を祖述したものと日を同じう
して論ずることの出来ないものであります。實に本書の一章一節のすべ
てが、君が心血をそゝいで收められた體驗の成果でありまして、任に日
本語の教授に當る人々は之を熟讀し、よく體得して教授の實際に應用す
る様に心掛けたならば、必ずや舊に倍する成績を擧げ得ることは深く信
じて疑はないのであります。

今や海外における日本語熱のさかんに向上しつゝあるとき、本書の世

に出づるに至つたことは、斯道のため心からの祝意をさゝげざるを得ない氣持をもちまして、こゝに一言を陳べ、松宮君積年の勞苦を謝し、併せて本書の發刊に對して慶賀の意を表する所以であります。

昭和十一年春三月

保 科 孝 一

自序

私が始めて日本語教授を試みたのは明治二十六年のことである。當時私は郷里前橋に在つて、在留宣教師の事業に従事しながら、その日本語學習をも助けたのである。

教方も分らず、何等の經驗もなく、今日から顧みると、實に慚愧に堪へないことばかりを繰り返してゐたのであつたが、しかし、私には非常に興味のあつたことは事實で、毎晩遅くまで教授の準備をして、翌朝生徒を待つのが待遠しい位に感じた。私はその頃は京都に行つて勉學する志望で、既にその用意をなしつつあつたのも抛つて、この日本語教授を以て立たうとの希望をもつやうになつた。

爾來、一進一退はあつたけれども、とにかく今日までこの仕事に立ち
觸つて來た。その間に經驗したことは別に述べるほどでもないが、漸次
に、言葉を教へることは意味を教へることだけでなく、言葉そのものを
自由に口述し得るやうにするのでなくてはならぬ。言葉が自由に繰れる
やうになるのは理解によるのではなく、全く練習の結果である。それには
以前から行はれてゐた翻譯教授の要はない。そして徹底的教授は口述式
個人的教授にあるといふことを判然と覺得するに至つた。その信念の下
に方法を考究しながら教授を進めてゐたのである。さうして、時日は經
驗を與へ、經驗は工夫を生み、工夫は方法を授けるといふ具合で、終に
今日採つてゐる日本語教授法を組立てるに至つたのである。

私は、最初この教授法を考究するについては、研究の資料なり參考書

なり、研究學修の爲の著作物を見たいと願つたが、邦人に對しての國語教授その他の刊行物はいくらもあるけれども、外國人に對してのものは、何も見出すことが出来なかつた。或語學教授書の譯書を見ないではなかつたが、別に新しい發見は得られなかつた。

私の日本語教授を聞き傳へて、各地の宣教師その他の人々が、わざわざ來學するもの多く、一外人の家の如きは常時外人の日本語學生が幾人か宿泊してをり、或は私の家へ押かけて來て、私共の家族と居を同うして勉學する人もあつた。或外人はこれを見て、「前橋は日本語のアテンスだ」など言つて笑はれたこともあつた。かくして私は終に家業を家のものに任せて、日本語教授に没頭せざるを得なくなつたのである。

明治四十五年の春、聘せられて日本語教師として上京することになり、

その翌年日語學校（現在の日語文化學校）の創設と共に、入つてその教授主任となつた。後辭して、日本語教師養成の目的を以て、別に松宮日本語學校を設けたけれども、昭和七年に至り、日語文化學校の提議に従ひ、兩校を併合し、私は元の巢に還つて國語部長として今日に及んでゐる。

願れば、私の日本語教授は既に四十三年に餘り、教授を與へた外國人は壹千人の上に達してゐる。この永年の經驗によつて自ら教授上の要點及難點に對處する方法も考へられた。といつても、別に日本語教授法として何等誇るべきものがあるのではない。元來、私は何等の學歷を有せず、語學教授に關する基礎的修養を積んだものでなく、語學教授の原理原則を究明して新研究の發表をする程の識量のあるものでもない。さういふ方面は寧ろ私には縁の遠い方であるとも言へる。唯、私は營々とし

て半生を日本語教授の爲に捧げて來た。生徒の耳と口との活動を觀察して、一言一句をも苟もせず、その進歩の跡を見極めて來たのみのことである。その經驗に基いた記述が即ち本著である。故に「教授法」といふよりも寧ろ日本語教授の實驗談とするのが適當であるかも知れない。

しかしながら、「議論よりも實驗」である場合も少なくない。若し、この小さい私の經驗的記述が、實際に日本語を教授し、又は今後この事業に當らんとする人々の參考に資することが多少なりとも出來るとするならば幸甚の至りである。殊に近時國勢の進展に伴ひ、日本語の擴進著しきは誠に慶ぶべき所であると同時に、日本語教授法の整備は一層の必要を感じずる折柄、その方面にも何等かの裨益する所あらば、私も亦國家の進運に一指を添へることが出來たことを感謝する次第である。

本著は、主として日本語學修の最初期から二三年間の教授を目當として、その大綱を記述した。若しそれ、補助科程文法綴文その他上級の研學に至つては、別に教授の方法を考慮すべきは言ふまでもない所である。本著刊行に就て、外務省文化事業部が特に支援を與へられたるは誠に感謝に堪へざる所にして茲に謝意を表する

昭和十一年晚春

著者識